年 3 号 19
2024

文芸

つれていけ！

マガジン

特別号：
POECIA

今号では：

XABI / COUSSEAU / ROSSO / SALINAS / VANNY

つれていけ!（Llevame!）は、エバ・フェバ（Eva Feba）氏の翻訳による第19号の日本語版を刊行できることを誇りに思います。本誌への寄稿や、ご意見・ご感想がございましたら、以下の連絡先までお問い合わせください：
ayaxzombieditorial@gmail.com

母は、沈黙の中にいます。母は、いつもどこか欺くような沈黙を纏っていました。それは、さざめきに満ちた沈黙。
母の沈黙は、常に何かの活動の背後にありました。沈黙は、その活動の音楽だったのです。
母の沈黙は、私の沈黙でもあります。その中で私たちは出会い、期待に満ちた眼差しを交わしながら、沈黙を守るのです。
母の沈黙の中にある、私の沈黙。私の沈黙を覆い、包み込み、天使の夢を見たいという願いへと続く、母の沈黙。
母のさざめきは、予感。それは、再会を予感させる仕草。
母のさざめきは、私の思考そのもの。
私が考えるとき、私は母のことしか考えません。母のことだけを考えています。
それは、私を想う母の思考に他ならないのです。
母の沈黙の中に、私がいます。そして、母もそこにいるのです。

夢想家と不眠の者

ある歌が
歌っています。「目覚めたまま夢を見る者たち。
眠れぬ夜を
過ごす者たち。」
彼らは
似ているのでしょうか？
それとも
同じなのでしょうか？
一枚の
コインの表と裏ではないのでしょうか？

あなたの
夢は不眠の子ではなかったのですか？
あなたの
不眠は夢を創り出す源ではなかったのですか？
夢こそが

あなたの最大の不眠（悩み）ではなかったのですか？
不眠こそが
最初の夢ではなかったのですか？

世界を
愛する同じ目が、同時に世界を嘆き悲しみもします。
築き上げる
同じ手が、すべてをなぎ倒しもします。
夢想家と
不眠の者。世界を創造する者と、自らを礫にする者。歌う者と
沈黙する者。
去り行く
前に泣いた者。泣く前の一生を笑い明かした者。（この世に
到着するやいなや、いたずらっぽく最初に笑った者。）

Salinas

いい？（だめ？）

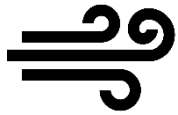
「いい？」
「だめ、
だめよ」
バンパーカーごっこ
なんて、
と私は言う。
「お願い、
お願い」
「頭を
ぶつけるわよ、やめなさい」
ブルルーン
ブルルーン
「いい加減にして、
クソったれな
バンパーカーなんて」
と私は思う。
「ママ！
チアゴの鼻から血が出てる」
彼らは続く、
止まらない
ガソリンの
安い国の車のよう、
電気自動車か
あのウサギのマークの
電池が入っているみたいに。
ついに
チアゴの鼻から
血が出て
そして息子は
立ち止まる、
自分自身の
破壊的な力に
怯えながら。

猛獣の乳母

息子から
おしゃぶりを

取り上げようと
するけれど
あまりに獰猛。
よだれを垂らし
同時に泣き、
もっと強く
噛みつき
野生の猫のように
私をひっかく。
いつの間に
私は
猛獣の乳母に
なったのだろう？
私の息子は
骨を離さない
一匹の犬
おしゃぶりが
床に
滑り落ちたって
気にさえしない
なぜなら
母親もまた一匹の猛獣で
それを
舐めまわして
消毒してから
返してくれると
分かっているから。

Xandra Vanny
trafkintu.com.ar/xandra-vanny



スデスタダ（南東の嵐）

過ぎ去った
嵐よ
今も感じる
お前の風の跡を、
私の肌を
滑り落ち
体に残した
あの線を
広がり、断片化していく
フラクタルな
植物のように
お前が最も辿る場所で。
ただの微風が作り出した
稲妻の
火傷の跡。

私の髪は
お前の強風の中で逆立ち、

お前の鞭の
形を成す。
お前の激しい衝撃に疲れ果てた私の目は、
もう空を
見上げることさえ苦しい。
お前が巻き上げる
土埃が 私を泣かせる。

お前の凍てつく
突風は
私を旗のように
使い
お前のサイクロンの命のままに、
お前が進む方へと
私を動かす。
お前のハリケーンに
抗おうとするけれど
飛び方なんて
習わなかった。
くしゃくしゃで
半分破れた
レジ袋のように、
お前の空気の中を 彷徨っている。

Xabi
@xab.r

私は書く
だってもう
どこも安全ではないから。
私は書く
だってもう
どこへ行けばいいか分からないから。
私は書く
逃げ出したいから、
けれど
どこへ、何から逃げればいいのかよく分からない。
私は書く
だってもう
偽ることなんてできないから
ドアの向こう側で
私を待っている
日常の生活に対して。
私は書く
私を疲れ果てさせる
この道をもう進みたくないから。
人生の
あまり人が通らない道を行きたい
あるいは
壁を壊れるまで叩き続けたい

そして
何か違うものが現れるのを待ちたい。
私は書く
何かを言わなければならないから、
たとえ何も言っていないとしても。
私は書く
内側を
引き裂かなければならないから、
内側の
居心地の悪い側を見つめ
湧き上がらせるまで
私が書く
その理由を。
私は書く
それが唯一の形だと信じているから
私自身を生き延びるための。
私は書く
死を恐れてはいないけれど
生を恐れるのをやめたいから。
私は書く
詩が私の命を救ってくれたから。

Julieta Rosso
trafkintu.com.ar/julieta-rosso

死の舞踏 (Danse Macabre)

初めて
息をしたとき
（母の外に出て）
一匹の黒い犬が
私の足を噛んだ。
誰も見ていなかった。

私は身を縮め、ちっぽけになり
初めて
目を開けたとき
一匹の黒い犬が
そこにもいた：
噛みつく
準備をして。
誰も覚えていない。

覚えているのは
最初の

歯のことではなく
口の中の黒い
噛み跡と
痛々しいよだれ、
私の、そして彼の。

逃げるために
這ったのだろうか？
驚くほどの雄弁さで
話したと人は言うまるで
理解しようとするかのように。

そこで、そこで黒い犬は
私の理性に
牙を立てた：
大人になることは死ぬことだと。

今では誰も
それを見ず、覚えもしない
永遠に私の足元にいるのに、
私でさえそうなのだ。

けれど
年月と共に奴は戻ると知っている
腹を空かせる
たびに。

しかし、あなたの笑い

かつて
あなたの目があった窪みには
今は何もない。

角張った筋肉
あなたの舌の
そして子宮のそれは
土へと還った。

接吻で砕かれ
挽かれる
あなたの
鎖骨。

あなたの手の残骸は
無造作に積み上げられている
吸い殻のように。

あなたの肋骨は
地面を噛んでいる
鋭い歯のように。

何も残っていない
すべての昼食も
すべての夕食も
あなたの内臓さえも。

病んだ根のように
あなたの背骨はねじ曲がる
時の重みによって。

ささくれた あなたの大腿骨は
踊り方を忘れて
久しい。

あなたの口角は
側頭部まで伸びている
奇怪な微笑みを浮かべて。

私は何度も あなたを掘り起こした
もはや あなたの頭蓋骨さえ
あなたには似ていない。

私の手さえ
同じではない
掘り続けてきたせいで。

Cristian Cousseau
trafkintu.com.ar/c_cousse

文化 事業体
TRIFULKA
trifulka.com.ar - @trifulka.com.ar

ここに
あなたの広告を